様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 ３０ 日現在

機関番号：３３９１３
研究種目：基盤研究(A)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３２４２０１５

研究課題名（和文）社会システム＜芸術＞とその変容－－現代における視覚文化／美術の理論構築

研究課題名（英文）Globalization and Transformation in the Social System of 'Art'--Toward a Construction of a Theory of Contemporary Art / Visual Culture

研究代表者
長田　謙一（NAGATA, KENICHI）

名古屋芸術大学・美術学部・教授

研究者番号：２０１０９１５１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　37,900,000円、（間接経費）　11,370,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、個別研究およびその総合を通して、以下の知見を獲得するに至った。近代社会において「自律性」を有する独自システムを形成したと理解されてきた芸術は、1980年代以降、アジア諸国、ロシア・旧東欧圏、そしてアフリカまでをも包含して成立する「グローバル・アートワールド」を成立させ、それは非西洋圏に進む「ビエンナーレ現象」に象徴される。今や芸術は、グローバル経済進捗に導かれグローバル/ローカルな政治に支えられて、経済・政治との相互分立的境界を溶解させ、諸領域相互溶融的な性格を強めている。しかし、それゆえにまた、現代の芸術は、それ自体が政治的・経済的等々の社会性格を顕在化させることともなる。

研究成果の概要（英文）：The art has been understood as an "autonomous" peculiar system in the modern society. The art brings about the "global art world" , which extends over Asian countries, Russia, the former east-Europe and African countries since 1980's. "Biennale phenomenon" , which proceeds especially in non-western sphere shows symbolically this globalization. But conducted by global economy and supported by politics, the boundary of art with economy and politics at present is dissolved in amutual telescope system. Consequently the art in recent days proves its some kind of social character, such as political, communicative or economic character, in its expression or existence manner.

研究分野：芸術学・芸術史・芸術一般

科研費の分科・細目：芸術諸学

キーワード：芸術　システム　グローバル　アートワールド　多元文化主義　大衆文化　芸術経済　プロパガンダ

１．研究開始当初の背景

（１）近代社会において芸術は「自律」的領域をなすに至ったということは、美学的にであれ、芸術史的にであれ、あるいは批評的にであれ、およそ芸術を論じるにあたって自明の前提とされてきた。しかし、そのような「自明」な前提のも、幾段階かの歴史的進展の中で、その意味を変じつつ深化させられてきた。第一には、ヨーロッパにおけるカント、さらにはヘーゲルに至る 19 世紀前半までの哲学的美学に代表される理論的自覚とそれに呼応する社会全体内における芸術の位置であり、次いで、19 世紀末から 20 世紀 20 年代にかけてのアヴァンギャルド展開期、さらに 20 世紀半ば以降 70 年代半ばにかけてである。その間に 1900 年前後の生活-芸術の統一をめぐる諸動向、1930 年代のプロパガンダおよび「全体主義」的芸術諸展開を間奏曲のようにはさみつつも、20 世紀終わり四半世紀以降となると、18 世紀以来長く続いてきた「芸術の自律」の基本的前提の問い直しを迫るさまざまな問題が顕在化するに至っている。芸術は、経済、政治、大衆文化、メディア、デザイン等々との間に分かちがたい関係を結び、その価値も「自律的」価値以外の諸価値・原理と深く交わるとともに、それだけに、多元的で、しばしば対立さえする諸原理に分立しながら展開するに至っている。

（２）芸術の理論的理解は、長く、主要には、「自律的芸術」を前提として、なによりも「作品」とその「作者」を中心対象としてきたが、とりわけ 20 世紀半ば以降、そのような理論的問題設定は、読者・受容論、テキスト論、文化産業論、大衆文化論、ジェンダー論、ポストコロニアリズム論、文化ディスタンクシオン論・文化資本論、さらには芸術制度論、あるいはあえて「芸術」を前提せぬ表象文化論あるいはカルチュラル・スタディーズ、等のさまざまな角度から問題化されてきた。それらの理論的展開を経て、20 世紀終わり四半世紀を迎えるころには、芸術は「アートワールド」に支えられる「制度」として、さらにはそのような制度をふまえ、作者・作品にとどまらず受容者・媒介者・諸機関等を包含し、かつ内部に幾重もの対立をはらむ多様な問題群として意識されるに至っていた。

（３）そのような多様な問題群を踏まえ、芸術の問題の総体は、しかし、「近代/芸術の終焉」という形で示されたほか、特に社会総体との関係では P.ブルデユー等の社会学的諸議論やカルチュラル・スタディーズにおいて問題とされてきたが、芸術の総体を全体社会の一サブ・システムとして包括的に示した点で、1997 年に出版された N.ルーマンの『社会の芸術』は大きな寄与とされてよい。

（４）しかし、そのルーマンの議論は、システム<芸術>を、経済・政治・教育等と「構造的カップリング」の関係に位置付けつつもそれ自体としてはまさに「自律的」なオートポイエーシス的なシステムとしてとらえる壮大な理論であった。特に 21 世紀に入って顕著となった芸術をめぐる諸問題は、しかし、まさにその「自律性」をこそ問い直す性格を備えているように見える。

（５）こうして、20 世紀終わり四半世紀以降、とりわけ 21 世紀に入って以降進んでいる芸術諸現象をつぶさに検討しつつ、その個々の問題域を超えてその連関総体を、おそらくは一つのシステム変容の問題として、いかにとらえうるか、ということが、喫緊にして近代全体の芸術議論の全体にもかかわる理論課題となっている。

２．研究の目的

（１）視覚文化・美術を主な対象として、社会全体システムのなかの一つの社会的サブシステムをなしているこの芸術に、特に 20 世紀終わり四半世紀ころ以降深く変容が進んでいることを、多面的な具体相に即して明らかにし、

（２）さらにその具体諸相を踏まえて、全体としてのそのシステム的変容を捉えうるあらたな理論の構築をはかる。

３．研究の方法

本研究は、平成 10-12 年基盤研究（B）(一)「<美術>展示空間の成立・変容―画廊・美術館・美術展」、平成 15-16 基盤研究（B）(一)「20 世紀における戦争と表象/芸術―展示・映像・印刷・プロダクツ」、平成 20-22 基盤研究（B）(一)「プロパガンダと芸術―『冷戦期・冷戦後』」の共同研究を研究代表者として企画推進してきた本基盤研究（A）(一)の研究代表者長田が、これらの次第に現代に及んできた芸術・社会的研究の成果を踏まえて、それらの知見と資料蓄積や国内外の研究者とのネットワークをいかして企画され取り組まれた。本研究には特に、ポスト・コロニアルな非西洋的芸術文化問い直し、ジェンダー論的議論方向、ニューヨーク近代美術館「ハイ＆ロー」展（1990）等で鋭く問われとりわけ日本で新たな展開を見せているポップ/サブ・カルチャーとの融合ないし接合、美術館を超えた生活の場で「非専門家」の多様な参加のもとに芸術を生成せしめるアート・プロジェクト等の興隆にかかわる議論方向、グローバル化し巨大化する美術市場及び芸術ビジネスや文化産業、地球規模の格差社会や環境問題にもかかわるデザイン興隆、芸術文化振興・政策、大型国際美術展、芸術教育、メディアと芸術といった特に現代の芸術の社会的存在様態にかかわる顕著な問題諸領域にかかわって、既に研究蓄積を有し、かつ芸術システムの総体に問題関心を寄せる研究者に分担研究者としての参加を求め、分担個別研究とそれを総合する共同討議とを、密接に組み合わせ、課題によっては調査旅行（2012：新潟、2013：韓国釜山・光州、2014：ベネチア・イスタンブール）等の形で共同研究全体ないしその一部の共同で現場を共有

し、また毎年度研究例会を共同討議の場として位置づけ、その時のテーマに即して必要に応じて関連研究者の知見の提供を仰いで、議論を深めることとした。

研究討議を伴う研究例会は、平成 23 年度には研究代表者による研究全体の課題と計画についての「基調報告」とそれにかかわる討議と、韓国のゲストをも招き、メキシコと韓国における「グローバリゼーション下の芸術変容」を論じる公開コロキウムの 2 回、24 年度には、「グローバル/ローカル」・「アジア/アート/ジェンダー」・「<美術>/〈教育〉」・「〈経済〉/〈アート〉」及び「〈政治〉/〈芸術文化〉」の 2 セッションの合計 4 回（5 セッション）、25 年度には、「スポーツ/芸術/オリンピック」・「身体/アート」・「大型国際展と全体社会」・「メディア/ラディオ」・「総括に向けて」そして共同研究者による研究成果報告と討議による「総括コロキウムⅠ」及び海外研究者を交えた「総括コロキウムⅡ」の合計 7 回の公開コロキウムを行った。

４．研究成果

（１） 20 世紀の終端近く、芸術は大きな変容過程に投げ込まれている。その徴候は多岐にわたり、しかもそれらは相互にしばしば一見矛盾し対立しあうかのようでさえある。だがそこに、おそらくは社会全体の変容に連動した、構造的な変容であり、美術の様式やイズムという、美術内部の立場の相違の次元でもなく、さらには、<芸術―反芸術>の対抗による芸術拡張の次元にとどまるものでさえもない。

（２）<芸術>を、自己産出的な、自律的価値領域にかかわる固有の機能に基づくコミュニケーション・システムとして近代社会のもとで分出した、近代の全体社会システムの一サブ社会システムであると示したのはニクラス・ルーマン（『社会の芸術』）である。しかし、上に示したような現代の芸術を襲う諸事態は、まさにルーマンによって精緻に示された社会システム〈芸術〉の自律性と閉じを揺るがすものとされよう。今日もとめられているのは、そのような諸事態を総括しうる現代のシステム〈芸術〉の理論とされ得よう。本研究は、そのようなシステム<芸術>理論の基礎的な要件を、以下の様な諸点に探った。①経済=政治と深く結びつきつつ巨大なグローバル・アートワールドの成立：とりわけ前世紀 80 年代末以降、「冷戦構造」終結および高次情報社会の招来とも深く連動したグローバリゼーションのもとで、それまで欧米の<アートワールド>に算入されてこなかった「中国」「韓国」「アジア」「アフリカ」あるいは「東欧」が次々と「西欧／米」アートワールドの「光」に照らされそこに組み入れられて巨大な〈グローバル・アートワールド〉が作り出されてきた。それは、しかし、主要には、非西洋の諸文化伝統が互いに合流し、複数の多様なアートワールズ（複数形）を並び立たせを成立させるというよりも、そのような多様性自体をも美術市場の対象として取り込み単数形のグローバル・アートワールドへと包摂して一つのいく過程として進行している。②しかし、それゆえにまた、このグローバリゼーションの過程において、〈ローカル〉なアートワールドもまた尖鋭に顕在化され、グローバル／ローカルが、ネイションステイトの単位においてもまた更に民族や地域の単位においても顕在化している。③そのようなローカル/グローバルの緊張した関係性は、グローバリゼーションのもとでのネイションステイト単位の〈美術史〉や〈民俗学〉の成立・推進や、あるいは逆に特に近年のグローバル・アートワールドの側からするネイションステイト美術史書き換えの同時進行としても現れている。④このグローバリゼーションの過程の中で、自律的とされてきた芸術のシステムは、さらに「クリエイティブ・クラス」（リチャード・フロリダ）の重視などにみられるように、市場や国家、あるいは帝国との深いかかわりを示し、同じくグローバリゼーション時代の〈経済〉や〈政治〉のシステムのなかに深くひたされる結果をも伴っている。⑤フロリダの説くクリエイティブ・クラスは、先進諸国においてすら人口の 3 分の 1 にしかならない「階級」であり、その残余の人間は「マクドナルド労働」と呼ばれる非創造的な生活を強いられる。「途上国」の大半の人々については言うを俟たない。⑥それはまた、他方で、特に電子的メディアとりわけインターネットの発展とも結びついて、ポップやエンタテインメントへと広がる視覚／感性文化とハイ・カルチャーとしての〈芸術〉との間の境界を曖昧にするいわばグローバルな「スーパーフラット化」過程とも接している 。それはさらに、「初音ミク」や「N 次創作」（濱野智史）という新しい「創作」の在り方にも直面する。⑦システム<芸術>を論じる議論は、こうして、現代のグローバル社会の在り方そのものと深く重なっていく。現代のグローバリゼーションは、近代の諸領域分出の境界を融解し、それぞれのサブ・システムが互いに入れ子のようになる構造をグローバルにつくりだし、しかもその全体を（新）自由主義にもとづく経済がリードしていく形で進行している。そこには、ローカル/グローバルの緊張した関係、さらには、誰がそのアーティスティックなコミュニケーションに参加できるかという問題、そしてこのような変容した社会システムの中で芸術の固有の意義の確保が、いずれも課題として孕まれている。

（３）本研究は、その成果を報告論集にまとめた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 126 件）

① 後小路雅弘、『ジャワ新聞』の美術関連記事―蘭印における日本軍政と「宣撫工作」、

哲学年報（九州大学大学院人文科学研究院）、査読無、73 巻、2014、pp.37-64
② 毛利嘉孝、スチュアート・ホールの〈声〉–ある有機的知識人の実践、『思想』岩波書店、査読無、1081 巻、2014、pp.60-70
③ 山本和弘、非合理的な愚か者－ミクロ経済学からみたアーティスト像、東北芸術工科大学紀要 NO.21、査読有、2014、pp.126-135
④ 椎原伸博、偽物の木で何が悪いのか?震災モニュメントの可能性について、「地域政策研究」高崎経済大学、査読無、6 巻、2014、pp.81-98
⑤ 椎原伸博、クールジャパンと日本の現代アート、社会システム〈芸術〉とその変容（平成 23-25 年度科学研究費補助金基盤研究（A）（1）研究成果報告書）、査読無、2014、pp.88-97
⑥ 山崎明子（共著）、「人口知能」誌の表紙デザイン意見・議論に接して－視覚表象研究の視点から－、『人工知能』人工知能学会誌、査読無、29－2 巻、2014、pp.167-171
⑦ 木村理恵子、石井小浪の「学校舞踊」－1930 年代の社会と舞踊に関する一考察、社会システム〈芸術〉とその変容（平成 23-25 年度科学研究費補助金基盤研究（A）（1）研究成果報告書）、査読無、2014、pp.18-29
⑧ 鴻野わか菜、ロシアのパフォーマンス・アート「ヴァイナー」&「プッシー・ライオット――身体と社会、社会システム〈芸術〉とその変容（平成 23-25 年度科学研究費補助金基盤研究（A）（1）研究成果報告書）、査読無、2014、pp.8-17
⑨ 竹中悠美、〈アメリカ写真〉の誕生―FSA 写真とニューヨーク近代美術館、民族藝術（民族藝術学会）、査読有、30 巻、2014、pp.180-187
⑩ 山口祥平、ズレる風景–解題「東京インプログレス」、東京インプログレス・ドキュメントブック、査読無、2014
⑪ 楠見清、マリリンもモナ・リザも自分も――マス・イメージの時代のポートレート革命、『美術手帖』2014 年 3 月号、査読無、第 1000 号、2014、pp.72-75
⑫ 楠見清、前衛ロック・バンドを世に出した敏腕プロデューサーとしての一面、『美術手帖』2014 年 3 月号、査読無、第 1000 号、2014、pp.112-115
⑬ 後小路雅弘、日本軍政と東南アジアの美術、哲学年報（九州大学大学院人文科学研究院）、査読無、72 巻、2013、pp.49-72
⑭ 熊倉純子、まちとひとをつなぐアートプロジェクト、「生涯学習政策研究」特集：地域づくりを支える社会教育（文部科学省生涯学習政策局編）、査読無、2013、pp.38-45
⑮ 山本和弘、マンハッタンの太陽－光学的芸術から熱学的芸術への拡張の可能性について、「マンハッタンの太陽」展カタログ、査読無、2013、pp.8-23
⑯ 暮沢剛巳、分身としてのキャラクター、ユリイカ、査読無、8 月臨時増刊号、2013 年、pp.37-45
⑰ 藤川哲、年報と百科事典－第 55 回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際美術展、芸術批評誌 リア、査読無、30 巻、2013、pp.143-149
⑱ 木田拓也、ミュージアム・オブ・アーツ・アンド・デザイン 1956-2008：工芸／CRAFT の行方、東京国立近代美術館研究紀要、査読有、17 巻、2013、pp.34-47
⑲ 竹中悠美（共著）、オルタナティブな教育の場としての美術館、生存学、査読無、6 巻、2013、pp.7-48
⑳ 山口祥平、川俣正「通路」―変転する制作、不変の批評性、美学藝術論研究会誌「カリスタ」、査読有、19 号、2013
21 佐藤道信、岡倉天心の世界観と歴史観、国華、査読無、1400 巻、2012、pp.22-31
22 佐藤道信、大倉集古館－“歴史”としてのコレクション、大倉集古館名品展・図録（山梨県立美術館）、査読無、2012、pp.11-15
23 水越伸、メディア論と生涯教育、日本生涯教育学会年報、査読無、2012、pp.107-124
24 神野真吾、実際的な教科へ～個性・創造性の捉え直し～、教育研究、査読無、no.1328、2012、pp.22-25
25 藤川哲、国際美術展の企画方針にみるユートピア思想－ゼーマン、ネスビット+オブリスト+ティーラワニット、クリストフ=バカルギエフ、山口大学文学会志、査読無、63 巻、2012、pp.21-40
26 木田拓也、Japanese Crafts and Cultural Exchange with the USA in the 1950s: Soft Power and John D. Rockefeller III during the Cold War、Journal of Design History、査読有、25 巻、2012、pp.379-399
27 山崎明子、Handicrafts in modern Japan: Raising mothers, cultivating feminine virtue、Motherhood- Mother Images in Korean Art, Mother Images in Asian Art、査読無、2012、pp.178-185
28 木村理恵子、芸術家の旅－「ゆく河の流れ」展に寄せて、ゆく河の流れ－美術と旅と物語（展覧会図録）、査読無、2012、pp.8-15
29 熊倉純子、アートとコミュニティ・ディベロップメント－まちなかアートプロジェクトは何を誘発するのか？、「住宅」特集：コミュニティ・デベロップメントと芸術・文化（社団法人日本住宅協会発行）、査読無、9 月号、2011、pp.16-23
30 暮沢剛巳、新たな価値の創造－バンクシーと美術館、ユリイカ、査読無、2011、pp.81-86
31 神野真吾、自己表現と公共性の間 －アートプロジェクト、美術教育の立ち位置、カリスタ、査読無、vol.17、2011、pp.97-101
32 鴻野わか菜、ドミートリー・クズミンの翼――肯定の詩学、人文社会科学研究、査読無、23 巻、2011、pp.1-21

〔学会発表〕（計 79 件）

① 神野真吾、縣拓充、総合大学における普通教育としてのアート実践、美術科教育学会、2014年3月28日、奈良教育大学
② 暮沢剛巳、パビリオンから観た日本万博、記録映画アーカイブ・プロジェクト、2014年3月1日、東京大学大学院情報学環（招待講演）
③ 鴻野わか菜、ロシア現代美術のシステムの変容――ソ連崩壊以後、総括コロキウム：社会システム〈芸術〉とその変容、2014年2月1日、東京藝術大学
④ 椎原伸博、持続可能性の視点からみた国際美術展覧会-あいちトリエンナーレ2013を中心に、日本アートマネジメント学会、2013年12月8日、九州大学(大橋キャンパス)
⑤ 後小路雅弘、ベトナム人画家たちの日本旅行―1943年、国際シンポジウム「異地与家郷」、2013年12月6日・7日、台湾大学（招待講演）
⑥ Nobuhiro SHIIHARA、What's Wrong with Fake Tree? On the Possibility of Disaster's Monument、19th International Congress of Aesthetics、2013年7月26日、Jagiellonian University Krakow Poland
⑦ 水越伸、ラジオ生態系の遷移、ラジオのメディア・エコロジー、2013年11月16日、山口情報芸術センター
⑧ 山口祥平、地域を再描するアートプロジェクト、公開コロキウム「社会システム《芸術》とその変容」、2013年11月17日、山口情報芸術センター
⑨ 木田拓也、1964 Tokyo Olympic Games, A Design Project: "Japanese-ness" in Olympic Designs、5th International Congress of InternationalAssociation of Societies of Design Research、2013年8月27日、芝浦工業大学
⑩ 後小路雅弘、宣撫工作と美術活動―アジア太平洋戦争下東南アジアの新聞を読む、第３１回アジア近代美術研究会、2013年7月14日、福岡県立美術館
⑪ 山崎明子、宮脇綾子と日本近代の手芸史、一宮市立三岸節子記念美術館「特別展アプリケにつづる愛　宮脇綾子展」、2013年7月14日、一宮市立三岸節子記念美術館（招待講演）
⑫ 鴻野わか菜、70年代ソ連のパフォーマンス・アート―非公式活動のゆくえ―、公開コロキウム「社会システムにおける身体/アート」、2013年6月23日、立命館大学
⑬ 竹中悠美、1930年代アメリカにおけるドキュメンタリーとアートの接合、第29回民族藝術学会大会、2013年4月28日、郡山女子大学
⑭ 暮沢剛巳、東京オリンピックと大阪万博、東京オリンピック・デザインプロジェクト展コロキウム、2013年4月21日、東京国立近代美術館講堂
⑮ 神野真吾、縣拓充、山根佳奈、美術館・大学・学校の連携、それぞれの学びと気づき　須田悦弘展の鑑賞プログラム実践を通して①（共）、美術科教育学会、2013年3月28日、島根大学
⑯ 熊倉純子、「何のためのアート」（総合タイトル）、「大槌町での芸術活動報告」（個別発表）、東京都による芸術文化を活用した被災地支援事業レポート、2013年1月26日、せんだいメディアテーク（招待講演）
⑰ 木田拓也、"Japanese-ness" in the Design Works for the Tokyo Olympics: Design Project 1964、AIGA design educators conference、2012年12月15日、University of Hawaii at Manoa
⑱ 佐藤道信、Is it possible to talk of Eastern Asian Art History?（東アジア美術史は可能か）、2012年12月8日、国立台北教育大学（招待講演）
⑲ 竹中悠美、米国農務省における貧困対策とアート、第14回日本アートマネジメント学会全国大会、2012年12月1日、神戸市立灘区民ホール
⑳ 山口祥平、アートアクティヴィティにおける経験形式-カワマタアーカイヴ　コールマイン田川のドキュメントを中心に、科研研究例会「アートにおけるグローバル・ローカル／ダブルスタンダード」、2012年8月25日、インターローカル・アート・ネットワーク・センター
21 Akiko YAMASAKI、Handicrafts in modern Japan: Raising mothers, cultivating feminine virtue、Ewha Womans University Museum International Symposium 2012"Motherhood - Mother Images in Asian Art"、2012年5月12日、Ewha Womans University Museum
22 水越伸、メディアの森はどうあるべきか：ポスト3.11の語りと記憶から、MELL Platz公開研究会、2011年12月10日、東北大学大学院情報科学研究科
23 熊倉純子、取手アートプロジェクトにおける「半農半芸」プロジェクトと放射線被害、「負の表現を考える」～この地で放射能をどう表現してゆくか（主催：三函座リバースプロジェクト実行委員会）、2011年12月3日、いわき市湯本温泉ホテルすみれ館大広間（招待講演）

〔図書〕（計 45 件）
① 後小路雅弘、佐藤道信、暮沢剛巳ほか（共著）、東京美術、『美術の日本近現代史―制度・言説・造型』、2014、p.956
② Doshin Sato、J Paul Getty Museum Pubns、2011、p.365
③ 加藤薫、新評論、イコンとしてのチェ・ゲバラ、2014、p.179
④ 水越伸、平凡社、現代デザイン事典　2014年度版、2014、p.293

⑤ 水越伸、放送大学教育振興会、改訂版　21世紀メディア論、2014、p.296
⑥ 伊藤守、毛利嘉孝（編著）、せりか書房、アフター・テレビジョン・スタディーズ、2014、p.330
⑦ 市田良彦、伊藤守、上野千鶴子、大澤真幸、姜尚中、毛利嘉孝、NHK出版、ネグリ、日本と向き合う、2014、p.240
⑧ 熊倉純子（監修）、長田謙一、毛利嘉孝、森司ほか、水曜社、『アートプロジェクト―芸術と共創する社会』、2014、p.266
⑨ 熊倉純子（監修）、東京文化発信プロジェクト室（東京都歴史文化財団）、音まち千住の縁2011-2013、2014、p.48
⑩ 竹中悠美（共著）、晃洋書房、カルチャー・ミックス―文化交換の美学序説、2014、p.216
⑪ 神野真吾、伊藤葉子、中山節子、山本純之介、本多佐保美、科学研究費補助金 基盤（C）報告書、芸術教育による感性に働きかけるESDの構築、2013、p.16
⑫ 神野真吾ほか、千葉アートネットワーク・プロジェクト、WiCAN2012 DOCUMENT、2013、p.92
⑬ 竹中悠美（共著）、幻冬舎、近現代の芸術史 造形篇 II アシア・アフリカと新しい潮流、2013、p.208
⑭ 加藤薫、骸骨の聖母サンタ・ムエルテ、新評論、2012、p.156
⑮ 暮沢剛巳、平凡社、自伝でわかる現代アート―先駆者8人の生涯、2012、p.256
⑯ 山崎明子（共著）、思文閣出版、「リカちゃん人形の身体表象への欲望――着替える身体から着替えない身体へ」『着衣する身体と女性の周縁化』、2012、p.480
⑰ 山崎明子（共著）、青弓社、ひとはなぜ乳房を求めるのか―危機の時代のジェンダー表象、2011、pp.7-22, pp.64-92, pp.207-213

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者
長田　謙一（NAGATA KENICHI）
名古屋芸術大学・美術学部・教授
研究者番号：20109151

(2)研究分担者
木村　理恵子（KIMURA RIEKO）
栃木県立美術館・学芸課・主任研究員
研究者番号：10370868
椎原　伸博（SHIIHARA NOBUHIRO）
実践女子大学・文学部・教授
研究者番号：20276679
佐藤　道信（SATO DOSHIN）
東京藝術大学・美術学部・教授
研究者番号：30154074
山本　和弘（YAMAMOTO KAZUHIRO）
栃木県立美術館・学芸課・特別研究員
研究者番号：30360473
楠見　清（KUSUMI KIYOSHI）
首都大学東京・システムデザイン学部・准教授
研究者番号：30514004
山崎　明子（YAMASAKI AKIKO）
奈良女子大学・生活環境学部・准教授
研究者番号：30571070
加藤　薫（KATO KAORU）
神奈川大学・経営学部・教授
研究者番号：40291968
木田　拓也（KIDA TAKUYA）
東京国立近代美術館・工芸課・研究員
研究者番号：
熊倉　純子（KUMAKURA SUMIKO）
東京藝術大学・音楽学部・教授
研究者番号：50345352
藤川　哲（FUJIKAWA SATOSHI）
山口大学・人文学部・准教授
研究者番号：50346540
鴻野　わか菜（KONO WAKANA）
千葉大学・文学部・准教授
研究者番号：50359593
後小路　雅弘（USHIROSHOJI MASAHIRO）
九州大学・人文科学研究院・教授
研究者番号：50359931
水越　伸（MIZUKOSHI SHIN）
東京大学大学院・学際情報学環・学際情報学府・教授
研究者番号：60219623
山口　祥平（YAMAGUCHI SHOHEI）
首都大学東京・システムデザイン学部・助教
研究者番号：60376910
毛利　嘉孝（MORI YOSHITAKA）
東京藝術大学・音楽学部・准教授
研究者番号：70304821
森　司（MORI TSUKASA）
首都大学東京・システムデザイン学部・非常勤講師
研究者番号：70601946
暮沢　剛巳（KURESAWA TAKEMI）
東京工科大学・デザイン学部・准教授
研究者番号：80591007
神野　真吾（JINNO SHINGO）
千葉大学・教育学部・准教授
研究者番号：90431733
竹中　悠美（TAKENAKA YUMI）
立命館大学・先端総合学術研究科・准教授
研究者番号：90599937